

# いのちと地域を守る

## 神戸新聞社の取り組み 次代の若者育成 「救命士」ら認定

兵庫東南あわじ市での「むすび塾」を河北新報社と共催した神戸新聞社(神戸市)は、次代を担う若者が阪神・淡路大震災の記憶を語り継ぐ「117KOBEBほうさいマスタープロジェクト」を2014年から取り組んでいる。

柱となるのが、地域防災の先頭に立つ「ほうさいマスター」の育成。各自自治体の「市民救命士」資格の取得と、インターネット上の防災WEB検定の合格を条件に、認定証を発行する。既に約800人のマスターが誕生した。

ほかにも、防災グッズを作るワークショップの開催



訓練の打ち合わせをする「117KOBEBほうさい委員会」の成田さん(左)と田中さん

### 117KOBEBほうさいマスタープロジェクト

兵庫東南あわじ市での「むすび塾」を河北新報社と共催した神戸新聞社(神戸市)は、次代を担う若者が阪神・淡路大震災の記憶を語り継ぐ「117KOBEBほうさいマスタープロジェクト」を2014年から取り組んでいる。

柱となるのが、地域防災の先頭に立つ「ほうさいマスター」の育成。各自自治体の「市民救命士」資格の取得と、インターネット上の防災WEB検定の合格を条件に、認定証を発行する。既に約800人のマスターが誕生した。

ほかにも、防災グッズを作るワークショップの開催

や阪神大震災や東日本大震災の教訓の伝承、会員制交流サイト(SNS)を活用した啓発活動など多彩な活動が企画・運営する。監督の岡田武史氏、漫画「キ

兵庫県内の大学など15校、学生70人で構成し、協力者一氏が名を連ねる。

今回の「むすび塾」には、委員長の兵庫県立大学、委員長の兵庫県立大学、委員長の兵庫県立大学

「東日本大震災のつらい体験を繰り返してほしくないから、はるばる来て話してくれた。その思いに応えなければならぬ。むすび塾に参加した南あわじ市福良地区の観光事業者は、自分に言い聞かせるように言った。

震災の語り部を務めた被災者3人は、残された遺族の悲しみや備えの大切さを訴えた。岩手、宮城県両の地元から淡路島までは700キロ以

### 「犠牲出さない街」決意新た

「東日本大震災のつらい体験を繰り返してほしくないから、はるばる来て話してくれた。その思いに応えなければならぬ。むすび塾に参加した南あわじ市福良地区の観光事業者は、自分に言い聞かせるように言った。

震災の語り部を務めた被災者3人は、残された遺族の悲しみや備えの大切さを訴えた。岩手、宮城県両の地元から淡路島までは700キロ以

### 振り返って

上。長旅をおして5年半前の過酷な体験を打ち明けた語り部の熱い思いは、現地の人に「災害犠牲を出さない街をつくる」との決意を新たにさせた。

福良地区は元々、防災意識が高い。夜間の避難訓練など官民一体の取り組みも光る。地区は鳴門海峡の渦潮見学などでにぎわう観光地だが、行客の災害対策は緒に就いたばかり。「観光客避難」をテーマに掲げ

たのはそんな背景からだ。結果は吉と出た。避難訓練とその後の語り合いは、課題が鮮明となった。ただでなく、地域のキーパーソンが集ったことで今後不可欠な体感も高まった。

南海トラフ巨大地震により地区で予想される津波は8.1級。観光客の安全確保は容易ではないが、語り部のメッセージを真正面から受け止めた福良の人たちなら、きつと克服してこれると信じている。

(防災・教育室 大泉大介)

東日本大震災の教訓を生かすため、河北新報社は防災の巡回ワークショップ「むすび塾」を2012年5月に始めました。毎月1回、町内会や学校、職場などで開いています。名称には、防災・地域と人のつながりを強め、防災・被災に結び付けたいの思いを込めました。次回は28日、大崎市古川で実施します。

随時、むすび塾の開催希望を受け付けています。連絡先は河北新報社防災・教育室022(211)1591。



福良地区の地図を囲み、津波避難訓練の反省点や成果を話し合う参加者

## 避難長期化 どう共存

南海トラフ巨大地震を想定した津波避難訓練の後、参加した地元関係者や東日本大震災の語り部ら16人が福良地区公民館に集まり、訓練で浮かび上がった課題を話し合った。

観光船からの避難誘導役が「津波到達まで50分」と時間を挙げて呼び掛けたのに対し、参加者からは「時間があっても荷物を取り戻らなければならない」と危惧する声が上がった。一方で「急がせるとパニックになりかねない」との指摘もあり、情報提供の在り方を巡り活発に意見を交わした。

観光船運航会社の鎌田勝義社長(50)は、土地勘がなく互いに面識がない上、時季によって入り込み数に大きな幅があるといった観光客避難の難しさに言及。「一本道で分かりやすい避難場所を設定し、シンプルな指示を心掛けて」と説明した。

避難途中、車での避難などを求める観光客役を誘導役が歩いて向かうよう諭す

## すぐ避難 自分の命自分で守る



子どもたちに被災体験を語る小沼さん

### 福良小で防災授業

南あわじ市での防災ワークショップ「むすび塾」の一環として、東日本大震災の教訓を学ぶ防災授業が同市福良小で2日あった。

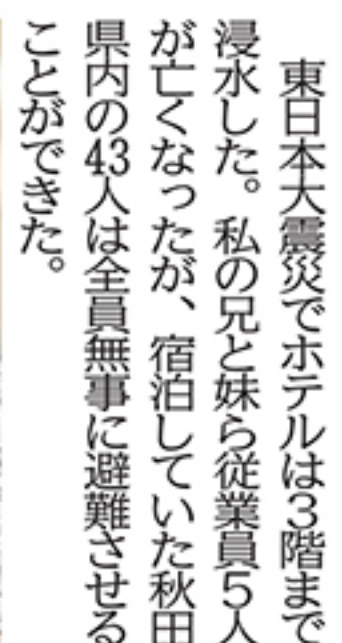
仙台市青葉区の宮城大4年小沼早紀さん(24)が講演し、震災時、仕事で自宅から離れた泊泊部に行った父勝一さん(58)が津波の犠牲になった経緯を紹介。「人はいつどこで被災するかわからない。自分の命は自分で守る。よう、地震があつたらすぐ避難できるように用心してほしい」と呼び掛けた。

水や食糧の備蓄が不十分で震災後の生活に苦労したことにも触れ、「家族とはぐれても大丈夫なように、落ち合う場所を決めておこう」と助言した。

「島国に住むリスクとして津波を想定外にはいけない」との訴えに、5、6年生と教職員計約100人が熱心に耳を傾けた。

## 東日本大震災の語り部から

### 日頃の訓練が命を救う



三陸ホテルはまぎく社長 千代川 茂さん(62)

東日本大震災でホテルは3階まで浸水した。私の兄と妹ら従業員5人が亡くなったが、宿泊していた秋田県内の43人は全員無事に避難させることができた。

混乱の中、率先して客を高台に誘導したのは、日頃から真面目に訓練に参加していた女性従業員だった。事前に経験したことは体が覚えていた。訓練が災害を防ぎ、命を救う。観光業にとって客の安全確保は最重要課題だ。あすか10年、30年先か、災害はいつか必ず来る。助かるのに奇跡はない。常にさまざまな事態を想定し、訓練を重ねて備えてほしい。

### 「逃げろ」の号令掛けて



宮城県南三陸町職員 三浦 勝美さん(54)

津波襲来時、職員43人が犠牲となった宮城県南三陸町防災対策庁舎の屋上にはいた。アンテナの根元にすがたが耐えきれなかった。波にまわれながらも、偶然流れてきた畳に集団で這って避難してほしい。

「逃げろ」と号令を掛けてほしい。震災の教訓から、車に救命胴衣を常備している。沖でも自立つ派手な色がいい。

### 誰にでも被災の可能性



宮城大4年 小沼 早紀さん(24)

自宅は仙台市青葉区の丘陵地であり、震災前に津波の危険性を考えたことはなかった。だから、父(勝一さん)を津波で失うとは思っていません。

父は社会福祉法人の職員で職場は所で被災する可能性は誰にでもある。津波は「島国に生きるリスク」で想定外にはいけない。

父は当時58歳。残された家族4人、父の分まで精いっぱい生きています。